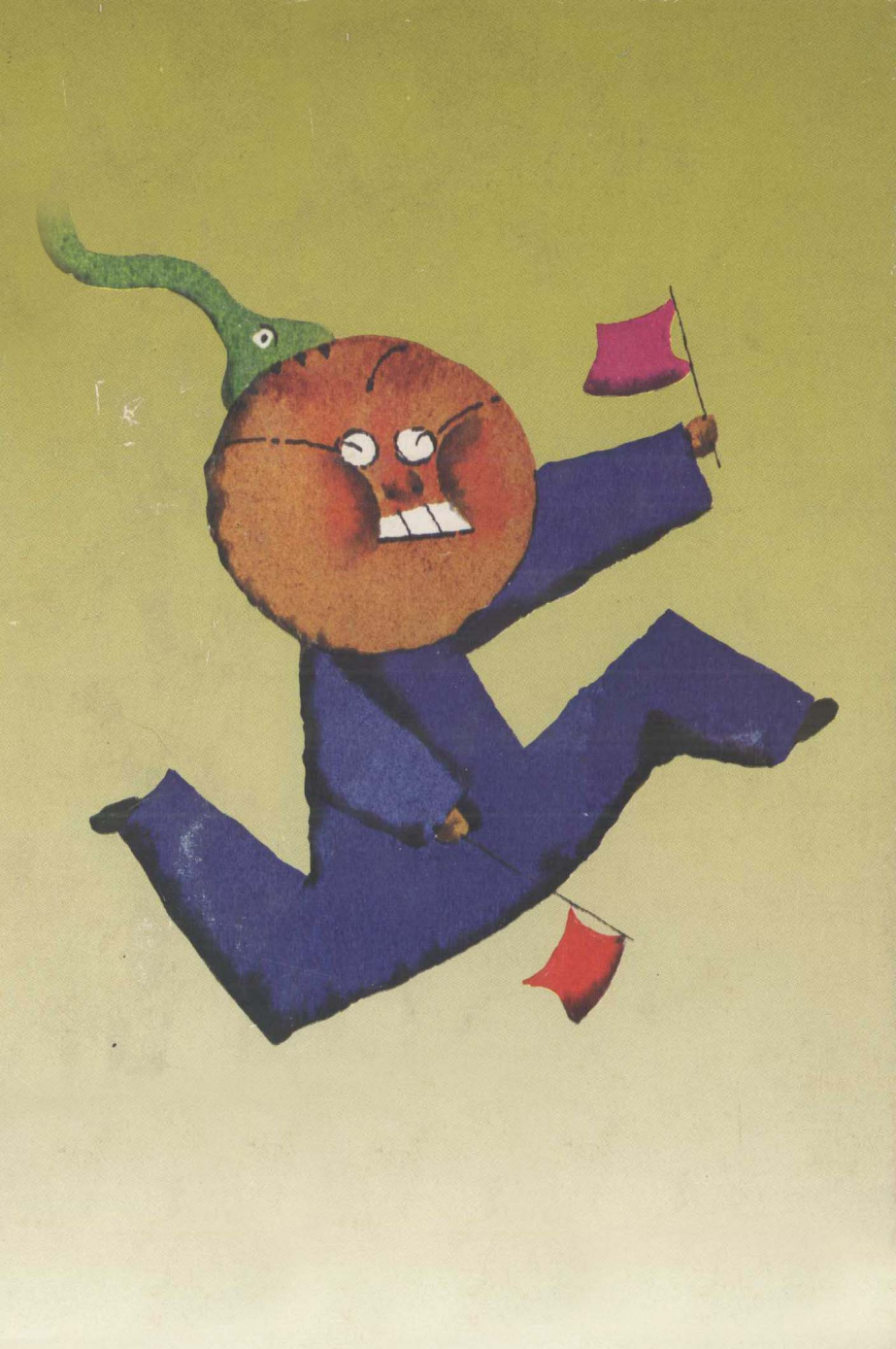

旗を振る男

藤本義一

旗を振る男

昭和五十三年五月三十日　初版発行

著　者　藤本義一
発行者　角川春樹
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三　郵便番号一〇二
振替　東京三-一九五二〇八　電話(03)二六五-七一一一
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872213-0946(0)

目次

旗を振る男　三
絵に描いた迷惑　三五
蟹（かに）　五九
袋蜘蛛（ふくろぐも）　九九
行旅死亡人の資格　一〇七
沼の中の沼　一三九
あとがき　二〇〇

装丁　阿部隆夫

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

旗を振る男

一

そいつに会ったのは、大阪キタの宇治電ビル近くのシナリオ学校の教室だった。

おれは二十九歳、映画界は大島渚、吉田喜重、篠田正浩といった『新しい波』派が擡頭し、新しい映像づくりが熱っぽく論じられていた頃である。

おれは、ようやくシナリオ・ライターとして、一本になった頃だ。それまでは、先輩の手直しを手伝ったりして、名前がスクリーンの上に出ることはなかった。いつもゴーストライター的存在で、時として監督のお恵みで共作者の端に名をつらねてもらったりし、SP物(短編の一時間足らずの歌謡映画)一本書いて、十万ぐらいの脚本料を受けとっていた。NHKの一時間物のラジオドラマ一本で八千五百円也だった。

どうして、こんなことを書くかというと、そいつが講座の一番はじめに、ぼそッとした声でおれに原稿料はいくらぐらいですか、あなたで……と、訊ねたのだ。

そいつは、おれの答えを聞くと、どういう計算をしたのかわからないが、

「一か月で三百万は儲かるわけですねえ。一年で三千六百万か。十年で三億六千万円か。二十年

で七億二千万か……」
といったのだった。
おれは仰天した。
「どこから、そんな計算をしたのか」
と訊ね返すと、
「しかし、なんでしょう。一日に一本ずつ映画シナリオを書けば、一か月に最低三百万でしょう」
というのだ。
「君、そんな量が書けると思うのか。どんなシナリオでも平均ペラ（二百字詰原稿用紙）で二百五十枚は書かなくてはならないのだ。いくら神技でも、毎日二百五十枚書けるか。イロハニホヘトでも疲れてしまうじゃないか。阿呆なこというな」
というと、そいつは、へへへッと笑ってみせ、
「本気にいってるんやないですよ、ぼくは。ただ、いつも、あなたがいっている我武者羅ガムシャラをやっていたら、そういう収入が得られるような気がしたんですわ」
急に相好をくずして、鼻先で掌をひらひらさせる仕草でいったのだった。
講座は、いつものようにはじめられた。シーンのいくつか束になったのがシークェンスと呼ばれるものでありといったごく常識的な映画シナリオの組立て方を二時間喋りつづけるのだ。黒板に組立ての要素を書いて、こういう時には、こういう科白が似つかわしいなどと、僅か一か月に二回の講義をやっているだけでも、喋っている途中に、ふっと虚しさが忍び込んでくる。それは角が摺り

切れてしまった碁や将棋の盤を前にして、数足らずの石子や馬子を並べている虚しさに似ているのだ。

教室の中には、約五十人が出席している。高校の先生もいれば、学生もいて、OLもいる。名簿によると一般商社のサラリーマンはいなくて、公務員というのが四、五人いる。彼等は、大学ノートに向って、せっせと鉛筆をはしらせていく。女性はどういうわけか丸顔が多くて、眼鏡をかけている。男は面長が多く、三分の一は顎が角張っている。俗にいう鰓の張った面相が多い。六か月目に新しい受講者が入ってくるたび、おれの好みの女性はいないものかと目を皿にするのだが、いない。細面で慎しく、そして上簇の蚕のような透きとおった肌をもった女はいないものかと思うのだが、いない。シナリオづくりを習おうとする女性は、なぜ、こんなに野暮ったいのかと思うのだ。

この絶望感は、六か月目の終了時の提出文で輪をかけることになる。九月入学で三月末で研究科の第一期が終り、それぞれが自作を提出するシステムになっているのだが、シナリオの習作を提出する者は五十人に二、三人であり、後は、六か月の受講感想文を出すのだが、読んでいると、がっくりしてしまうことが多い。

たとえば、次のような文が頻繁に出てくるのだ。

――シナリオを学ぶには、一鳥一石では出来ないことがわかりました。

と、堂々と書いてくる。一石二鳥というのならわかるが、この一鳥一石は、どうやら一朝一夕のことだとわかる。まだ、こういうのは、微笑を誘ってくれるから助かるが、中にはなにをいっているのかわからないのがある。

――シナリオに於ける諸問題は、単調な風景を形而下に展開させ、形式的な問題を、謂わば人工的、従って頽廃的に展開さす一条件であり、倦怠、退屈、無為な時間空間を……云々。

といったものに出遭うと、ただもう、うんざりしてしまうのだ。

ところが、そいつは素晴しい脚本を書いてきた。原稿用紙にして僅か十五、六枚のものだったが、起承転結は見事に処理されていたし、主題は、薬物の投与を誤った医師が良心の呵責の果てに、鳥になることを熱心に考えていくというものだった。題は『エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ』というものだった。そいつは、この呪文のような題名に、おれが理解に苦しむだろうと考慮してか、解説をつけていた。

――この言葉は、十字架にかけられたイエスの最後の叫びからとったものです。エロイというのは「神よ！」ということです。だから『神よ、神よ、どうして私を見棄てられるのですか』ということになります。

旧約聖書の詩篇なんぞ読んだことのないおれに、この題名は新鮮な響きをもって迫ってきたのだった。

おれは、そいつを見直すことにした。僅か六か月間の受講で、これほどのシナリオの技術と主題の掌握が出来る男は、過去二年間にいなかった。

誤字もなければ脱字もなかった。生原稿の文字も印刷の文字に似て、しっかりしたものである。だから、おれは、最後の講義の時に、そいつのシナリオを褒めあげ、これくらいのことは受講で得てほしいなどといったのだった。そいつは、おれの讃辞を耳にしながら、してやったりと自信に満

ちた笑顔で頷いている。これが一寸嫌味だった。もう少し恐縮するだろうと思っていたのだ。上背のあるそいつは、背骨をぐんと伸ばし、目を細めて、教室の仲間たちを見降す態度をとった。

その日、最後の講義が終って、おれたちは、トレンチコートの衿を立てて、まだまだ寒い夜の街に出た。

そいつは、五、六人の仲間を従えて、おれを追って来た。

「ぼくら、気の合った者同志で研究会をやりたいのですが……」

そいつは、身長がおれより数センチ高く、毛糸のトックリを着た胸を張って、おれを見降して、いった。がっしりした肩幅で、剛い髪が額に一束に垂れ下り、近くで見ると眼窩の窪みに光る眼は澄んでいた。

「それはいいなあ」

おれたちは、梅田新道の交叉点の方に歩いて、北への横断歩道を渡り、近松の浄瑠璃で有名なお初天神をくぐり、境内横の露路を折れて、関東煮屋に入り、コップ酒で牛蒡天や蒟蒻を肴にして暖をとった。

そいつは、実に饒舌だった。酒も強く、食欲も旺盛だった。見ているだけで、こちらの食欲を促すような気持のいい食べ方であった。青年の覇気といったものが、そいつの体から発散してくるように思えた。

「ぼくはですね、シナリオを勉強するようになってから、物を観察するのが、とても楽しくなりましたですよ。物というよりも、人間を観察するのが、とても愉快でしてねえ。あ、人間は、こう

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

いう時に、こういうことを考え、こういう行動をするものかなどと、毎日発見して楽しいですよ」
というのだった。
他の連中は、ただもう彼の自信に溢れた饒舌に圧倒されているばかりだった。
そいつは、おれよりも一歳上の昭和七年生れだといい、戦時中の思い出をあれこれと喋った。
「どうも、おれたちの世代には飢餓感というものがあるらしい」
などといった。
「君らは、こういうことを聞いても、もうひとつ、ぴーんとこないだろう」
仲間を睥睨しながら、彼は両手をズボンのポケットに突込み、例のごとくぴんと背筋を伸ばして、大きな体を左右に楽しく揺らすのだった。どうやら、彼の得意のポーズというのは、こういう肘を張って体を揺らす癖だとわかった。
「Sさんは、シナリオの人間観察には、実に恵まれた職場にいるもんなあ」
大学生の坂上という男がいうと、そいつは、うんうんと頷いて、条件、状況に恵まれているというのだった。
「君、どこに勤めているんだ……」
おれが訊ねると、おやッといった面持になって、
「ぼくは、入学の折の調書に詳しく記入してるんやけども……」
それがわかってもらっていなかったのが至極残念だというふうに、また大きく体を揺するのだった。

「ぼくは、精神病院の事務局に勤めているんでしてねえ。そう、ま、なんというか。千客万来というのは、精神病院のことをいうんやないかと思うんですよ」

「ほう……」

「分裂、妄想、ノイローゼには色情狂というのがいますよ。年齢はべつべつですけどもねえ、面白いのんは、彼等は、自分たちが絶対に気狂いやと思ってえへんことですわ。自分こそ、真面目な、平凡な、正常な社会生活を営む資格があると思うてるんですわ。客観的に見れば、みんな、そりゃ、おかしいのですよねえ。奇怪な行動をするのがいますよ。机の下に入ったりして……」

彼は教室の帰りに、喫茶店のスナックでこの種の話を仲間たちにやっているとみえ、富竹というOLが、ベレー帽の首をかしげて、おれにそいつの話のつづきを聞かせてくれたのだった。

「どうして、机の下に入るか知ってはりますか」

「被害妄想というやつやないかなあ。誰かに脅迫されているとか、追跡されているとかという……」

「そうやないんですて、ね、Sさん……」

彼女は、そいつに合槌を求めると、そいつは、いくつ目かの蒟蒻の三角形を口に咥えたまま、楽しげに頷いてみせた。そして、口をもごもごさせて、そういう患者もいることはいるけどと、思い入れたっぷりの返事をした。

「体がね、次第に大きくなっていくんですて。どんどん気球みたいに膨れあがっていくように思うんですて……。そやから、その人は一日中、机の下に入ったまま出て来やはらへんのですて……」

そういってから、彼女は、突如、けたたましい笑声をたてた。
おれは、彼女が狂ったのではないかと思ったのだった。他の連中も、彼女の突拍子もない笑いに注目した。
「それ、それ、ね、Sさん……」
彼女は、練辛子の付いた箸でそいつの胸のあたりを指して、話の先をそいつに促すようにいった。
「え……」
そいつは、一瞬、途呆けた眼差で彼女が一体なにをいい出したのかと測っている様子だった。
「あれ、あれよォ、Sさん。此間、あたしにいってくれたじゃないのッ……」
「あれ……」
「そうやんか。象の……」
といって、彼女は慌てて箸を皿に置いて、眉根に皺を刻んだのだ。
「ほれ、象のウンコの話、ね、あれ、面白いやんか」
「ああ、あの話か……」
そいつは、悠然として顎を突き出して、目を細め、これからとっておきの話をしてやるからなという面持になったのだった。

二

そいつの話してくれた『象のウンコ』とでも題を付ければぴったりする話は、たしかに面白かった。

「患者は、かつて京都大学の化学の研究室にいたわけで、優秀な学者の卵と折紙がついていた人です」

戦時中、その患者は爆薬の研究に従事したというのである。自らの意志で没頭したわけではない。軍の要請で研究を余儀なくされたという。

「はじめ、その患者は、いや、その科学者は自分のつくった爆薬で、どれほどの人が殺されるのかと考えたら、夜も眠れんかったといいます。そこで、その人は、もし、この爆薬を詰め込んだ爆弾がアメリカ本土に投下されて、沢山の人が死んだなら、自分の責任であるし、どないしようかと何日も考えた挙句、ひとつの結論を得たんですな。どういう結論やと思いますか」

そいつは、おれたち一人一人の推理力を試そうとするように、片目を極端に細めたのだった。おれは、それまでは気付かなかったが、彼の細めた片目は、底辺の広い三角形のようになり、三角の窓の片目は、おれたちを嘲笑する光を湛えているのだった。

「それはですね、日本が運よくアメリカに勝ってですよ、日本軍人や日本人が、どかどかと土足でアメリカに乗り込めるようになった暁に、その人は、頭を丸めて……つまり、坊主になってです

なァ、アメリカ本土に渡って、その爆弾で死んだアメリカ人たちの骨を拾うて菩提を弔う一生を送ろうと思うたんですなあ……。そこまで考えたら、その人は気が楽になって、爆薬づくりに精を出すことが苦痛やのうなったんやそうです」

これはどこかで聞いた話だとおれは思った。ゴーゴリの『死せる魂』の主人公が、死んだ農奴の戸籍を買い集めていく話と似ていると思った。その科学者は、学生時代にでもゴーゴリの作品を読んだのではなかろうかと想像した。

「そこで、その人はですな、爆薬づくりに没頭したんですが、うまくいかんのですなあ。なんでうまくいかんかわかりますか」

そいつは話を出し惜しみするふうに、一節語り終れば、おれたちを見回した。あまりいい気分ではなかった。そいつは、おれより年齢の上では一歳上なんだが、教室ではおれの生徒だった男だ。その生徒が、片目を奇怪な三角形にしながら、まるでこちらの知能指数を調べるようなことをいうのだ。

「そこで発狂したわけか」

おれがいうと、そいつは、おれの推理を小莫迦にした表情になり、発狂までは時間がありますよといい、これで人間が発狂したなら、これほど簡単な話はないやないですかというのだった。

「ほな、どないしてん、その人は……」

酒の酔いも手伝っていたおれは、こういったもってまわったいい方を早く片付けてしまいたかった。三角形の目と小莫迦にしたそいつの顔が、どういうわけか急に煩しいものになってきた。が、

そいつは、おれの苛立ちなんぞは無視して、自分だけがすべて知っている優越感で口許に、にたりとしたわらいを泛かべ、コップ酒を舐めているのだった。

「あのね、その爆薬が、どないしても固まらへんのですて……」

そいつが長い沈黙をしているので、富竹安子が話の後を継いだ。すると、そいつは、呻くような声で彼女に、いうな！　といったのだ。低いが肺腑を抉る音声だった。

「すみません」

彼女は、やや蒼醒めた表情で詫びを入れた。この女の表情から、おれはそいつと彼女がすでに肉体関係に入っているなと見抜いたのだった。

「そう、爆薬が固型にならんのですなあ……」

またもゆっくりした口調でいい、ちッと小さく舌打ちして、先にいいやがってと低声でいい、子供が拗ねた時に、肩に顎をのせて擦る仕草を繰り返していたが、急に、いつものとおり傲岸ともいえる姿勢で背筋を伸ばして語りはじめた。

「その人は、今でもね、藁半紙と鉛筆を与えておけば温和しいのでして、それを取り上げると狂暴性を発揮するんですよ」

「藁半紙になにを書いてる……」

おれがいうと、そいつは、わかりきったことを今更聞かなくてもいいだろうという表情になって、

「化学のですな、分子の構造式を書いてますのです。CとかOとか、もう一面に小さい字を書いて、それを線で結んでいるんですよ、その人は……」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c